

## 第252回 昭和の森自然観察会

### 植物の冬越し

佐野由輝（大網白里市）

日 時：2012年12月9日（日）13:00～15:00 天候：晴れ

参加者：8名（うち子ども2名） 指導員14名 計22名

担当指導員：佐藤一枝、佐野由輝

木枯らし吹きすさぶ中、動物のように自ら移動することのできない植物たちが、どのように冬の寒さを堪え忍んでいるかを観察しました。自然観察会を行うには、厳しい気象条件ではありましたが、そのおかげで、植物たちの冬越しの知恵が身にしみて実感することができたようです。

まずは、草本類の植物たちがどのように冬越しをしているかについて、観察しました。おおざっぱに分けると、種として冬を越す仲間、地上部を枯らして根で冬を越す仲間、地上部をロゼット型にして冬を越す仲間の3つのタイプに分かれます。今回の観察会では、特にロゼット型の植物がどうして、このような姿になっているのかをみんなで考えました。ちょうど、強風が吹き荒れている中だったので、参加者からは、「風から身を守るため」という意見が出ました。風による物理的なダメージに加え、乾燥した風が吹き続けると、植物体内の水分が蒸散してしまいます。参加者にロゼット型の植物を触ってもらったところ、寒風の中でも十分な水分を保持しているようでした。このほか、「食害から身を守るため」とか「地表付近は温度が高いため」「効率よく光合成を行うため」等の意見がありました。

続いて、木本類の冬越しの方法を観察しました。木本類は、おおざっぱに分けると、葉を全て落として冬越しをするタイプ（落葉樹）と葉を残して冬越しをするタイプ（常緑樹）に分かれます。常緑樹と落葉樹の葉を比べてもらい、常緑樹の葉は厚みがありロウ質で覆われていることにより冬の寒さと乾燥に耐えていることを説明しました。

そして、服を重ね着しているタイプのコナラやソメイヨシノ、芽に毛が生えているタイプのハクウンボクやニガキ、毛皮のコートを身にまとっているコブシ等、落葉樹を中心に代表的な樹木の冬芽を観察しました。樹種によって、寒さや乾燥から身を守る手段が異なることに参加者の皆さんには感心している様子でした。変わった例として、ハクウンボクの葉柄がすっぽり冬芽を隠している様子を観察し、葉っぱが落ちるぎりぎりまで、冬芽を守っていることに、参加者の皆さんには感心していました。このほか、タラノキの葉痕にはっきり見られる水や養分の通り道である維管束、バナナの形そっくりなカツラの果実、アカシデとイヌシデの冬芽の先のとんがり具合の違いなどを参加者の皆さんに感じてもらったり、赤みがかったウメの冬芽では、「芽ぐむ、芽吹く、芽立つ」という繊細な日本語の表現ぶりを紹介したりしました。

今回の参加者の中には、元気な女の子が2人いたのですが、2人とも積極的で、いろんな物を発見してくれました。樹皮についている地衣類や、赤くなりかけているスギの雄花、大人なら見逃しそうな小さな虫や小さな草にも興味を示し、何かを見つけるたびに指導員に声をかけ、質問していました。指導員の説明にも、ほほを赤くし、目を輝かせて、興味津々に聞いていました。

最後に、木の葉が落ちる仕組みを鋭く詠んだ、徒然草第155段（兼好法師）の1節、「木の葉の落つるも、先づ落ちて芽ぐむにはあらず、下より萌しつはるに堪へずして落つるなり。」を紹介し、観察会を終えました。